

- 2059 織田正吉『ジョークとトリック 頭を柔かくする発想』（講談社, 1983年, 講談社現代新書）

日本語に翻訳された『ふしぎの国のアリス』が子どもたちによく読まれているのがむしろ不思議だ。『ふしぎの国のアリス』は「しゃれの国のアリス」である。

p. 119

- 2060 川又千秋『反在士の鏡』（早川書房, 1981年, ハヤカワ文庫JA）

世界中が絵がかりで、偉大なチェスをやってるんだわ——これが世界だとしたらね。

(ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』より)

p. 8

- 2061 紀田順一郎『読書の整理学』（朝日新聞社, 1986年, 朝日文庫）

これはひとりバルザックにかぎらない。ちょっと考えただけでもゲーテ、ラブレ、シェイクスピア、オースティン、ディケンズ、チャーサー、ポー、ドストエフスキ、チャーホフ、ジョンソン（ボズウェル）、フォークナーなどにも多かれ少なかれ似たような傾向がみられる。最近ではルイス・キャロルなども掲げておくべきだろう。

p. 205

- 2062 北杜夫『南太平洋ひるね旅』（新潮社, 1962年, ポケット・ライブラリ25）

さて、どこいらでこの旅行記を終えるべきか。
『アリス』の中のスペードの王さまなら言うところだ。
「終りになったら、やめよ」

p. 257

- 2063 熊井明子「マロンの日記」（柳瀬尚紀編『猫百話』（筑摩書房, 1988年, ちくま文庫） p. 125-135）

その表紙のチェシャ猫と眼が合った瞬間、ぼくは、「不思議の国のアリス」の世界に入った。

p. 126

- 2064 小林弘利『東京キングダム』（集英社, 1991年, 集英社スーパーファンタジー文庫）

あたし是最悪のワンダーランドに迷い込んだアリスだ。英雄は次の場面で卑劣な小悪党に変身し、邪悪な畏から逃げようとすれば逆に近づいてしまう。右に進めばいつのまにか左にきていて、上に昇れば、それは下に墜落する。すべてがあべこべ、すべてが間違っている不思議の国。

p. 130